

巻頭言

会員の皆様には、日頃より当法人の活動に格別のご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

さて、本年5月29日、気象庁は防災気象情報の大幅な見直しを実施します。防災気象情報は、災害対応力を目的に高度化が図られてきました。一方で、情報の増加や運用の複雑化により、「分かりにくさ」が課題となっていました。2019年に内閣府が策定した「避難情報に関するガイドライン」では、自治体が発表する避難情報に5段階の警戒レベルを明示することとなりました。しかし、気象庁が発表する情報との整合性が不十分な部分もあり、今回、整理と体系化が行われることになりました。

見直しの対象は、「河川氾濫」「大雨」「土砂災害」「高潮」など、住民の避難行動に直結する重要な情報です。新たに警報と特別警報の間に位置づけられる「レベル4相当」の情報が導入されるほか、「洪水警報」は「氾濫警報」へと名称が変更されます。その他にも運用や表

理事 橋波 伸治



現方法の見直しが多数含まれており、内容は広範に及びます。

私自身、長年気象業界にかかわってまいりましたが、今回の改定はこれまでで最も大きな制度変更の一つと感じております。だからこそ、この新しい仕組みが社会に正しく理解され、適切な避難行動につながることを願っております。会員の皆様とともに理解を深め、適切な情報活用が進むよう、微力ながら広報活動に取り組んでまいります。ぜひ[気象庁の特設ページ](#)をご覧ください。新制度への理解を深めていただければ幸いです。

当法人は、気象に関するさまざまな取り組みを通じて、皆様のお役に立つ活動を展開してまいります。ご意見・ご要望などがございましたら、どうぞお気軽にお寄せください。引き続きご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

※[アンダーライン付斜体語句](#)にはリンクを張ってある。

目次

- ・巻頭言-----理事 橋波 伸治
- ・気象技術世界博覧会に出席して----理事 武田 秀樹
- ・第54回気象測器研究会の報告-----理事 大藤 明克
- ・[連載]風のはなし(12)----- --理事長 林 泰一
- ・[連載]鳥気象学(3)-----気象予報士会 太田 佳似
- ・[報告]気象技術世界博覧会の報告--理事 武田 秀樹
- ・[連載] 農業に必要とされる気象情報とは?(1)
-----理事 鳥谷 均
- ・[海外だより]
海外の気象局事情～ジブチ (その1)～
-----気象業務支援センター 小林 遼平
- ・事務局からのお知らせ-----事務局長 竹中 信人
- ・編集後記-----京都分室 森田 務

気象技術世界博覧会2025に出席して 株式会社第一科学 執行役員 武田 秀樹

2025年10月14日～10月16日オーストリアのウィーンで気象技術世界博覧会が開催され、弊社製品の出展のために行きました。ウィーンで開催されるのは2024年に続いて2回目です。写真1は展示会場の正面ゲートです。今回、世界気象機関(WMO)主催の世界気象機関技術会議は行われませんでした(TECO)。次回、TECOの開催は2026年10月6日～10月8日オランダのアムステルダムで予定されています。



写真1 気象技術世界博覧会
正面ゲート

翌週、フランスのランスで第7回湿度および水分に関する国際シンポジウム(TEMPMEKO-ISHM)が開催(写真2)され、これにも出席してきました。世界的な温度・湿度標準に関わる研究・技術成果が発表、議論される貴重な場です。

これら展示会・シンポジウムは世界の最新の気象測器の情報が得られます。本誌5ページで会場の様子をご紹介します。



写真2 湿度および水分に関する国際シンポジウム会場

第54回気象測器研究会の報告

Mest 京都分室 大藤 明克

第54回気象測器研究会は、会員の(株)第一科学様の会議室をお借りし、対面・オンライン(ZOOM)方式を



講演会場の様子

併用し、令和8年3月11日(水)に開催された。全体で22名の参加があった。企画は鳥谷理事が担当し、「農業気象分野への気象情報利用」と題し、3題の講演をして頂いた。最後に武田理事から「気象技術世界博覧会2025に出席して」と題し、海外の気象・環境観測・標準についての最新情報を紹介して頂いた。詳細は本誌5ページに紹介する。

①「放射冷却と凍霜害のお話」

(気象システム技術協会・圃場診断システム推進機構 鳥谷 均 様)

本講演では、農業気象における放射冷却と凍霜害に関し解説された。放射冷却では、地表面や作物が大気より強く冷え、これにより葉温が低くなる点が重要とされた。農家は気温だけでなく作物温度を考慮して対策を判断するため、気象関係者も現象の理解が重要であることを指摘された。

この、凍霜害は霜の付着ではなく、作物内部の水分が凍結して細胞が損傷する現象であり、生育段階や耐性によって被害の程度が異なる。また、盆地や斜面といった局所地形、風の強弱、雲の有無などが冷却の強さを左右し、被害発生に大きく影響することも示された。

対策として、防霜ファンや被覆資材、散水氷結法などが紹介された。

②「農業現場の生産性向上に寄与する気象データ活用事例の紹介」

(株式会社 廣幡農園 廣幡 泰治 様)

本講演では、農業分野におけるDXの重要性として、気象データや圃場データを活用したデータ駆動型農業が紹介された。従来、経験や勘に頼っていた栽培管理を、気温・土壌水分をセンサーで観測、また、生育状況なども計測し、数値化して蓄積・分析することで、科学的な意思決定が可能になる点が強調された。

具体例としてカブの生育を取り上げ、積算気温モデルにより播種・収穫時期を定量的に把握し、出荷計画の最適化や廃棄リスクの低減につなげた事例が示された。また、土壌水分を水分計で計測するとともにタンクモデルで推定し、灌水や耕運の適切なタイミングの判断に活用で

きる事が説明された。さらに、生成AIやアプリ、アグリテック企業との連携により、作業管理や経営計画まで含めた統合的な農業DXの可能性が示された。

③「農業で活躍できる気象予報士の創出」

(合同会社ノーエン 齋藤 典之 様)

本講演では、農業×気象データ活用事業の取組みが紹介された。日本の農業は、大規模化・高齢化・肥料高騰など課題が多い一方、技術成長の余地は大きいことが指摘された。しかし、小規模農家では技術人材が不足しており、地域に根ざした気象予報士が、作物や地域条件に応じた情報提供や作業判断支援を行える「農業気象アドバイザー」となるようにしたい。この育成活動は2022年頃から本格化し、2024年度には5回の講習会に延べ127名が参加した。生育観察日誌による分析も行ったが、参加者には農業未経験の首都圏の高齢層が多く、現場との距離が課題となった。一方、農政や農機メーカーの予報士もおられたが、学んだ知識を現場で活かしきれない悩みもあるとのこと。今後、生産者データの活用も図り、予報士が現場理解を深める取組みをすることである。

【Q&A】7つの質問があったが、紙面の制約で、5つのみ掲載する。

[鳥谷様関連]

Q.表面温度計で計測する葉温は、葉1枚か、圃場のある程度の範囲の葉の表面温度なのか。

A.ある程度の範囲の葉の表面温度である。計測は、放射温度計を使う。温度計は試行錯誤しながら対象とする植物の放射特性を考慮して計測する。

[廣幡様関連]

Q1. タンクモデルはAIでどこまで作れるのか？

A1. ChatGPTに雨量・蒸発・浸透を与えて、タンクモデルを構築する。ただしパラメータの特定は実測データが必須。

Q2. 農業DXが進まない最大の理由は？

A2. 生育データ・作業データ・土壌データなどがデジタル化されていないこと。

Q3. 土壌水分センサーにはどんな種類がある？

A3. 体積含水率センサー、マトリックスポテンシャルセンサー(吸引圧の計測)の2種類。どちらも安定しているが高価。安価なセンサーは精度不足が多い。

[齋藤様関連]

Q. 農業経験のない予報士がアドバイザーをするのはハードルが高くないか？

A. 農業未経験でも「雨がいつ降るか」など基本的な気象情報で十分役立つ。高度な病害虫予測まで求められているわけではなく、気象データの未活用部分は多い。

[連載]風のはなし(12) - 強風による列車の脱線事故について[その2] -
Mest 理事長 林 泰一



前号に続いて、強風による列車の脱線転覆事故4事例[(1)には発生原因が同一の2事例を含む]について報告する。

(1) 三陸鉄道および根室本線特急「おおぞら10号」の列車脱線転覆事故

1994年2月22日、東北地方及び北海道では強風による被害が相次いだ。岩手県三陸町で発生した三陸鉄道南リアス線の脱線転覆事故(15時22分頃発生、重症2名、軽症1名)、北海道十勝支庁新得町で発生したJR北海道根室線特急「おおぞら10号」の脱線転覆事故(17時45分頃、負傷28名)である。

この二つの事故は、2月21日から22日にかけて急激に発達した低気圧が、本州南岸から三陸沖、北海道東岸を通過したことによる。この低気圧の中心気圧は、20日21時から21日21時までの24時間に32hPa低下し急激に発達した、いわゆる「爆弾低気圧」である。事故発生場所は、三陸鉄道では太平洋に面したリアス式海岸、根室本線では日高山脈の東に位置し、いずれも強風が頻発する地域であった。二つの事故発生時の風速は35-37m/sと推定され、これは転覆限界風速を超える強風である。

(2) 羽越線特急「いなほ14号」の脱線転覆事故

2005年12月25日19時14分頃、山形県東田川郡庄内町のJR東日本羽越本線の第2最上川橋梁付近において、秋田発新潟行き特急「いなほ14号」が橋梁を通過した直後に脱線転覆した。この事故により5人が死亡し、32人が重軽傷を負った(写真1)。前線を伴った温帯低気圧の暖域で発生した「竜巻」ないしは「ダウンバースト」に伴う強風で、脱線事故現場付近の構造物の被害や、事後の風洞実験の結果から風速は40m/s以上と推定されている。

(3) 日豊本線特急「にちりん9号」の脱線転覆事故

2006年9月17日13時50分頃、宮崎県JR九州日豊

本線の南延岡駅付近で、特急「にちりん9号」が脱線転覆した(写真2)。

運転士と乗客の6名が軽傷を負った。9月17日12時から15時にかけて強い台風第13号が九州の西を時速約35kmで北北東に進んでおり、事故現場は台



写真1 脱線転覆した「いなほ14号」

風の強風域に入っており、夕方までには暴風域に入るおそれがあった。静止気象衛星画像では、台風を中心に巻き込むレインバンドが事故発生当時に事故現場地域を覆っていた。この不安定な大気状態のなかで、藤田スケールF2の竜巻が発生し、風速は50-69m/sと推定された。列車の転覆限界風速を超えている。



写真2 脱線転覆した「にちりん9号」

鉄道にとって強風は列車の安全走行に直接関わる大気現象であり、強風の際には運行が中止される。昨今では天気予報により、前日から列車の計画運休が決定されることも多くなってきた。

【連載】鳥気象学 — 3. 温暖化でウグイスの初鳴きはどうか? —

気象予報士会 太田 佳似



前は、ウグイスの初鳴き予報が、桜の開花予報などに使われる「積算気温」で予測できるといってお話をしました。では、これから温暖化が進むとウグイスの初鳴きはどのように変化して行くのでしょうか？ 農研機構（農業・食品産業技術総合研究機構）のメッシュ農業気象データには「[メッシュ温暖化シナリオデータ](#)」が提供されています。この2℃上昇シナリオと4℃上昇シナリオを用いて、2050年、2100年のウグイス初鳴き日を予測してみることにしました。

●将来のウグイス初鳴き日の変化は？

表1は主な8都市での現在と将来の初鳴日の予測結果です。例えば、現在と4℃上昇シナリオの2100年（赤色）を比較すると、鹿児島では2月21日から2月9日まで12日早くなるのに対して、稚内では5月5日から3月18日まで48日も早くなっています、北の地方ほど温暖化の影響が大きく、初鳴日の早まりも大きいことが分かります。なお、東京では3月2日から2月11日まで19日早くなり、二十四節気での「啓蟄」から「立春」近くまで早まると予想されます。

一方、2℃上昇シナリオの2050年から2100年（青色）の変化を見ると、鹿児島では2月19日から2月15日まで5日早まっていますが、稚内では4月3日から4月16日へと13日ほど遅くなっています、2℃上昇シナリオでは、2050年以降は、北の地方から温暖化が緩和され、ウグイスの初鳴きも戻って来ることが分かります。

●ウグイス初鳴日の将来予測の難しさ

ただし、ウグイス初鳴日の予測はそう単純ではないかも知れません。ここでは、ウグイスの生態が変化しないと仮定しましたが、本当にそうでしょうか？

現在のウグイスは、東北地方南部の北緯40度より南で留鳥（渡りをしない鳥）、北海道と東北地方北部で夏鳥（渡り鳥）です。そのため、北緯40度の南北で、積算気温による予測モデルも少し異なっています。なので、温暖化が進むと、東北地方北部などでウグイスが夏鳥から留鳥に変化して、初鳴日に影響するかも知れません。

また、渡りの時期は、積算気温でなく、日長時間に左右されることが一般的に知られているので、夏鳥の地域のウグイスは、温暖化に伴って昆虫の発生時期（積算気温で決まる）の変化に適応できず減少する可能性もありますし（[オランダに渡るマダラヒタキの報告例](#)）、あるいは何らかの適応力を示すかも知れません。

●ツバメの帰巢日予報も公開

ところで、みなさんがお住まいの地域での今年のウグイスの初鳴日はバードリサーチで公開していた予報と合っていたでしょうか？ また、気付かれた方もおられるかも知れませんが、ウグイス予報のすぐ隣には「[ツバメの初認予報](#)」も掲載しています。これはツバメの帰巢日（巣に戻って来る日）を予想するもので、基本的にはウグイスと同じように積算気温を用いて予測しています。ツバメは渡り鳥（夏鳥）ですが「巣に戻る日」はウグイスの初鳴き同様、繁殖開始の合図となるため、餌となる昆虫が多くなる時期に合わせていて積算気温で予測できると考えています。実際、ウグイスほどではありませんが、割と合っています。

さて、渡り鳥の話が出て来ましたが、私のような鳥屋（バードウォッチャー）が気になるのは、迷って渡って来る珍しい「迷鳥」（通常は日本で観察されないが稀に訪れてくれる鳥）たちです。そこで次回は「迷鳥はなぜ日本にやって来るのか？」というお話をしたいと思います。ここでも気象現象が大いに関係しているのです。

表1 主な8都市での現在と将来のウグイス初鳴日予測

地点名	北緯	現在	2℃上昇シナリオ		4℃上昇シナリオ		北ほど早まる	戻るのも早い		
			2050年	2100年	2050年	2100年				
稚内	45.42	5月5日	4月3日	4月16日	4月1日	3月18日	-48日	+13日		
札幌	43.06	4月27日	4月2日	4月9日	3月28日	3月14日	↑	↓		
仙台	38.26	3月24日	3月9日	3月6日	3月1日	2月18日				
東京	35.69	3月2日	2月20日	2月19日	2月17日	2月11日				
名古屋	35.17	3月9日	2月26日	2月25日	2月22日	2月14日				
大阪	34.68	3月3日	2月22日	2月21日	2月19日	2月12日				
福岡	33.58	2月27日	2月21日	2月18日	2月16日	2月10日				
鹿児島	31.56	2月21日	2月19日	2月15日	2月14日	2月9日			-12日	-5日

二十四節気	立春	雨水	啓蟄	春分	清明	穀雨	立夏
	2月4日頃	2月19日頃	3月5日頃	3月21日頃	4月5日頃	4月20日頃	5月5日頃

※本文中、アンダーライン付斜体語句にはリンクを張ってある

【報告】気象技術世界博覧会(Meteorological Technology World Expo 2025)の報告

株式会社第一科学 執行役員 武田秀樹



2025年10月14日～10月16日、オーストリアの首都ウィーンにて気象技術世界博覧会が開催され展示会への弊社ブース出展のため行ってきました。ウィーンで開催されるのは2024年に続いて2回目です。この時期のウィーンの気候は穏やかで快適に過ごすことが出来ました。

弊社の今回の参加は、コロナ禍以降2回目になるのですが、日本からの参加は弊社の他4社となり若干の寂しさを感じた展示会でした。

写真1の展示会場内の日本のメーカーのブースの様子、写真3は各国のプレゼン会場の様子です。

例年の展示会場では、世界気象機関(WMO)が主催する各国の発表が行われているのですが、展示会場内の各出展会社が、製品説明や事例紹介などを行っていることが多く、学術的なパネルディスカッションは、展示会場内の小さなスペースで数回程度行われている印象です(写真2参照)。

TECO 会議 (Technical Conference on Meteorological and Environmental Instruments and Methods of Observation) は今年オランダ首都アムステルダムで開催予定です。ぜひ、皆様の参加を期待し、オールジャパンで日本の気象業界を盛り上げることができればと思った次第です。

今回、現地でお世話になった

- ・明星電気株式会社様
- ・古野電気株式会社様
- ・クリマテック株式会社様
- ・NTTアドバンステクノロジー株式会社様

におかれましては紙面にて大変恐縮ですが御礼申し上げます。

翌週、フランスのランスで第7回湿度および水分に関する国際シンポジウム(TEMPMEKO-ISHM 2025)が開催され、これにも出席してきました。

日本からは特定国立研究開発法人産業技術総合研究所の温度・湿度標準に関わる研究者13名の方が参加されています。世界から200名以上の方が参加し、連日、成果発表をされる貴重な場です(写真3参照プレゼン会場)。

日本の標準における不確かさ検証能力の高さは世界的に見て5本指に入る実績があり、気象・半導体・自動車などの分野でも品質の高さに貢献していることを誇りに思った次第です。

ご興味のある方はいろいろとご紹介できると思いますのでご相談ください。



写真1 日本のメーカーのブースの様子



写真2 展示会場内のディスカッションの様子



写真3 TEMPMEKOのプレゼン会場の様子



写真4 TEMPMEKOでのパーティ会場の様子

【連載】農業に必要とされる気象情報とは？

第1回 気象情報は農業にとってどんな情報なのか —「見せたい絵」と「見たい絵」

Mest 理事 鳥谷均



気象情報は、インターネットやマスコミを通じて、十分に提供されているように見えます。それにもかかわらず、農業分野でそれらが十分に使われているという実感を持っていないのは、いったいなぜなのでしょう。

日本では、高精度な気象観測網と解析・予測技術が整備され、気象庁をはじめ、民間の気象会社や測器メーカーによって、「正確で信頼できる気象情報」が、かつてないほど社会に供給されています。一方で、農業分野に目を向けると、「気象データはあるが、有効に使われていない」という声を耳にする機会は少なくありません。このギャップは、どこから生まれるのでしょうか。

私はここ数年、農業分野における気象情報の高度利用に携わる中で、この問題が単なる精度や説明不足ではなく、構造的な違いに由来しているのではないかと感じるようになりました。

■「見たい絵」と「見せたい絵」は同じだろうか

気象情報の供給者は、センサーの精度、応答性、安定性、再現性といった技術的価値を、製品やサービスの中核に据えています。これは、社会インフラとしての気象観測を支えるうえで不可欠であり、極めて重要な貢献です。しかし、気象情報会社や測器メーカーの営業担当者からは、「精度や性能は説明できるが、決め手にならない」、「導入はされたが、数年後には使われなくなる」、「結局、スマートフォンの天気予報で足りると言われる」といった声を聞くことがあります。そして、このようなことは、営業の問題や価格の問題として片づけられがちですが、本当にそれだけなのでしょうか。



見せたい情報と見たい情報

農業現場の利用者が、測器や気象データに期待しているのは、必ずしも「正確に大気現象を説明しているか」という点ではありません。農家が知りたいのは、例えば次のようなことです。

- この数値から、水やりをすべきかどうかを判断できるのか
- この数値から、生育が進んでいるのか遅れているのかが分かるのか
- この数値から、作業を前倒しすべきか、見送るべきかを決められるのか

つまり、気象情報が意思決定にどう結びつくかという点です。

気象情報は、「大気現象を科学的に描くための画材」ではなく、「行動を意味づけるための画材」として使うことを期待されているのです。

■ 天気予報は「状態」を伝え、

農業は「行動」を決める

気象情報供給者は、気象情報を用いて、大気中で起きている現象を、できるだけ正確に描こうとしています。気温、湿度、降水、放射、風、それらはすべて、大気の状態を理解するための要素です。

一方、農業は、生育、作業、収量、品質といった結果を左右する行動を選択する営みです。ですから、農業の現場で気象情報が使われるとき、農家が本当に描きたいのは、大気現象そのものではありません。

農家が気象情報を通して見たいのは、

- ・作物の生育が進んでいるのか
- ・生理的なストレスがかかっていないか
- ・次の作業判断をどうすべきか

といった、作物側で起きている変化です。

言い換えれば、気象情報供給者は「大気現象」を描き、農家はその情報を翻訳することで「作物の生育・生理」を描こうとしているのではないのでしょうか。この「描きたい対象の違い」こそが、両者のあいだに感じられる違和感の正体だと思います。ここには、情報の質ではなく、目的と時間軸の違いがあります。気象情報は瞬間値や予測値によって状態を説明しますが、農業の判断は、瞬間・日・週・積算・変化といった時間スケールを含めて行われます。何の判断のために、どの時間スケールで、どの指標が必要なかが明確でないままでは、農業現場において気象情報は「占い」のように扱われてしまいます。

■ 気象情報供給者に問われていること

ここで強調したいのは、気象情報供給者が間違っているという話ではありません。問題は、技術的に優れた気象情報が、十分に価値として翻訳されていないことにあります。本稿では、気象情報が使われにくい理由を、「精度」ではなく「描いている対象の違い」という視点から整理しました。

■ 次回予告

今回は、農家が実際にどのような判断を行っているのかに目を向け、作業日誌を手がかりに、「農家が見たい気象の絵」を整理してみたいと思います。

海外だより 海外の気象局事情～ジブチ（その1）～

一般財団法人 気象業務支援センター 主任技師 小林 遼平



前回のパキスタンから移動して、2か国目はジブチです。よく「ジプチ」と呼ぶ方がいますが、「ジブチ」です。といっても、どこにある国か分かる方は少ないと思います。ジブチは、アフリカ東部にある「アフリカの角」（この表現を知りませんでした、一般的な表現です）と呼ばれる地域に位置しています。ソマリア海賊対策で自衛隊が駐留する拠点として馴染みのある方もいるかもしれません。日本との時差は6時間です。

国土は約2.3万km²で、四国を一回り大きくした程度です。上空から見ると草木がほとんど無い荒野のようなデコボコな土地が広がります。このデコボコは、ワジと呼ばれる涸れ川によって形成されています。降水日数は年15日程度しかなく、基本的に川に水は流れません。そのため、土地を得られない人たちはここに居留していますが、上流で雨が降ると全て流されてしまうため、降水観測や予警報・情報伝達が非常に重要です。

観測や警報の責任を持つジブチ気象局はジブチ国際空港に隣接しており、50名ほどの職員で運営されています。公的機関ですが、政府組織ではなく空港の予算を割譲して運営しています。ちなみに先に述べた自衛隊基地の壁

を隔てたすぐ隣に気象局があります。有人観測地点はジブチ国際空港内にある露場の1か所のみです。AWS（自動気象観測装置）は最近設置され、現在は22か所ほどになっています（内2か所はJICAの支援で設置）。

また、これまでGTS（全球通信システム）回線が繋がっていなかったため観測データの国際交換ができていませんでしたが、JICA技術協力プロジェクトでの支援により2026年2月からWIS2.0（WMO Information System 2.0）へジブチ空港の有人観測結果がアップロードされるようになりました。

ジブチの緯度はホーチミンとほぼ同じですが、砂漠気候に属しており世界でも有数の灼熱地帯です。2000年以降の最高気温は49.8℃（2023年7月8日）、平均最高気温は35℃、同最低気温は27℃にもなります。最も暑くなる6月～9月は平均最高気温は40度を超え、外出できないほどです。

現在は白金抵抗温度計が使われていますが、それ以前は日本ではなかなか見ないと思われる最高示度60℃の水銀温度計を用いました。

次もジブチの話を続けます。



写真 ジブチ国内では唯一の有人観測所のあるジブチ国際空港の露場（左：北側、右：南側）

事務局からのお知らせ

- 2月10日 第12回理事会
- 3月11日 第13回理事会、第54回気象測器研究会
- 4月14日 第1回理事会
- 5月11日 第2回理事会を予定
- 6月16日 第3回理事会、総会、第55回気象測器研究会を予定

編集後記

今年の気象庁のサクラの開花状況（主にソメイヨシノが対象。沖縄・奄美ではヒカンザクラ、北海道の一部ではエゾヤマザクラを対象）の一覧表を見ると、沖縄を中心として南では開花が遅くなり、東日本や北日本を中心として北に行くほど開花が早くなっています。その中ほどの中国地方や近畿地方では遅れや進みがさほど顕著ではなく、将来的には南から北まで一斉に咲くようになるのではないかとすら想像しています。

ところで、今年はサクラの話題として、倒木に関するニュースをいつもより多く聞いたように思います。サクラの倒木には、いくつも原因があるようですが、基本的には樹木の高齢化ということのようです。

第二次大戦後まもなく植樹されたサクラは、日本人のイメージするサクラの元となっているソメイヨシノが多かったようです。そして、そのソメイヨシノは木質が柔らかいことなどから病気にかかりやすく、寿命が短いのだそうです。それらの木々が60年余りを経て、寿命を迎えつつあり、倒木しやすくなっているらしいのです。

第二次大戦を経て構築された社会のシステムが、老朽化し、様々なところで破綻してきたと感じるニュースを頻繁に見聞きするようになりました。そして、今年はサクラの木までがその仲間入りをするのかと、いささか啞然として聞きました。サクラの倒木により、怪我をされた方もいらっしゃるようです。皆さんもサクラの老木の下を歩かれる時には、十分に気をつけてお歩きください。
(森田 務)



「サクラの倒木」という題で Nano Banana 2
(Google の AI による描画ツール) が示した絵